

学習の秋！ で近畿税研集会が開催されました

メインは「サステイナブル社会と税制改革」



先週の土曜十六日に「近畿税研集会」がエル大阪であり約五〇名の参加がありました。

内容は関西大学の鶴田廣巳教授の「サステイナブル社会と税制改革」という講演と、税研推進委員の「変化の中の税務行政」という報告でした。

サステイナブルとは

サステイナブルとは維持可能なという意味で辞典的な定義でいうと「リサイクルや環境に優しい素材を使って廃棄物を出さないようにした（製品・デザインなど）。「持続できる」の意で、環境と調和した生活を次世

代に存続させ、環境破壊を予防することをめざす。」ということになります。

フライブルク

鶴田教授は自らのオランダ留学の体験で見聞した、「サステイナブル都市」の実例としてバーミンガム、ストラスブール、フライブルクをあげて、どう実践されているかを説明されました。

インターネットでフライブルクを検索すると、環境を大事にする都市としていろんな人が日本からも見学にいつておりいろんな記事が読めます

たとえば、
環境先進都市として知られるドイツの市。近隣の黒い森シ



ユヴァル
ツヴァル
ト）が酸
性雨で枯
れ始め
たことを
きっかけ
に、環境
への取り
組みを
強化した。乗用車よりも環境負荷
が低い公共交通機関、鉄道と路面
電車の利用を推奨しており、家族
の使用も可能な格安定期券を発
行している。また、公共交通機関
の駅には無料の駐車場を設置し、
駅で乗用車から公共交通機関に
乗り換える「パークアンドライ
ド」の制度も充実している。中心
市街地には乗用車の乗り入れも
禁止するなど、様々な環境政策に
取り組んでいる。
こういう形で紹介されてい



上の二枚はフライブルク市のHPから



ます。

めざす方向として

鶴田氏はそうした都市を日本がめざすべき都市のありかた、自治のあり方、暮らしのあり方として提示されたのです。

日本国民がもつ不安感、閉塞感の大きな原因として財政赤字があります。隠れ借金をいれると一千兆円を

講演のなかでも触れていました。わかりやすくお奨めです。著者は全国税労組の税研関係の役員をされていました。

超えるような赤字財政のもとで国民の多くは社会保障が目に見える形で削られていき、収入も減るといいう状況で打開の方向を無意識にさぐっていると言えます。そういうとき、ア

メリカ型（市場原理主義）ではない行き方としてのヨーロッパ型（社会市場主義ともいえる）は大いに参考になると説明されました。税制改革については、消費税導入時に言われ、今もいわれている「広く薄く」負担するではなくて、今や庶民にとっては「広く厚く」負担する税制がめざされていると指摘しました。

一方経団連などの税制改革要求はその殆どが通るようになってきていることも強調されました。

最後に真の構造改革には「環境政策」「外来型発展ではなくて内発的發展を支える公共事業と財政・税制改革」「地方分権の実現」「地域社会の再生」が必要だと力説されました。